

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：平成 19 年度 ～ 平成 21 年度

課題番号：19730493

研究課題名（和文）パフォーマンスティヴィティによる人間形成論に基づく道德教育実践モデルの研究

研究課題名（英文）A Study of the Practice Model of Moral Education based on the theory of character building through the idea of performativity

研究代表者 奥野 佐矢子（OKUNO Sayako）
下関市立大学経済学部・准教授

研究成果の概要（和文）：

道德性形成論においてこれまで援用されてきた「心」や「感情」など「内面」に焦点化した説明モデルでは扱いきれない事象は、実は発話など言語のもつ遂行的な力（パフォーマンスティヴィティ）に着目することによって分析可能であることが示された。本研究において申請者は、言語のパフォーマンス力に着目した道德性形成モデルを定式化し、その妥当性を示すとともに、こんにち、その効果の高さで評価されているある実践プログラムを対象として分析することを通じて、より整合的に説明することが可能であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Most theories of morality typically depend on a method of explanation that focusses on inward forms on our inner movements such as 'mind' and 'emotion.' However, it has been found that there are many cases that cannot be explained by such an inward form of analysis. In this study, a new model of analysis constructed using the idea of performativity – the power of language – which is suitable for analyzing difficult cases will be introduced. This study will show the utility and usability of the new model through analyzing its application in a highly evaluated practical program of moral education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	120,000	720,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1500,000	390,000	1890,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：

キーワード：教育学、道徳教育、人間形成

パフォーマンスティヴィティ

1. 研究開始当初の背景

多様な価値や文化が混在する現代社会にあって、「道徳教育の危機」が繰り返し叫ばれている。だが土戸が指摘するように、「道徳の揺らぎ」と正面から向き合うことなく道徳教育を「徳目授業」へとすり替える対処療法的対応では、今日の道徳教育が抱える問題状況を乗り越えることはできない（『<道徳>は教えられるのか?』教育開発研究所、2003年）。では今日の道徳教育は、解決の糸口をどこに見出せばよいのか。

このとき手がかりとなりうるのが、このような「道徳の揺らぎ」の原因を、近代教育学が依拠してきた人間形成モデルそのものの破綻とみる先行研究である。例えば心理学領域では、子どもの問題行動をその「心」の中にのみ求めようとする心理主義化社会への批判（小沢牧子編『子どもの<心の危機>はほんとうか?』教育開発研究所、2003年）、また教育哲学領域では、発達する「個性」への助成的介入という従来のものとは異なる新たな教育モデル構築の試み（例えば今井康雄著『メディアの教育学—「教育」の再定義のために—』東京大学出版会、2004年）などが見出される。

このように心理学、教育哲学の領域双方から「心」や発達する「個性」など人間の内面のみに焦点化した近代的な人間形成モデルの妥当性が疑われている今、このモデルに依拠したまま道徳教育実践を継続していくことは困難であると考えられる。以上のことから道徳教育において求められるのは、旧来の人間形成モデルの限界を踏まえた新たな人間形成モデルを模索すること、そしてそのモデルに依拠した新たな道徳教育モデルを再構築することであると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、パフォーマンスティヴィティ概念を鍵概念とする新たな道徳教育実践モデルを理論的に構築し、その可能性を明らかにすることにある。

「研究開始当初の背景」で述べた問題意識から申請者はこれまで

(1) 「道徳の揺らぎ」の原因である人間形成モデル破綻の要因を分析し、そして

(2) これに代わる新たな人間形成モデルを模索する、というかたちで研究を行って

きた。

具体的には

(1) 道徳教育における近代的な人間形成モデルの典型である道徳性発達段階説を提唱したコールバーグ (Lawrence Kohlberg) および彼の思想の継承者たちに焦点をあわせ、彼らが展開する道徳教育実践が直面した「破綻」にどのような対処がなされてきたかを分析し、その結果、

(2) 「破綻」への対処を繰り返す過程において、道徳性発達心理学の提唱者らが次第に道徳性発達段階説に依拠した人間形成モデルとは異なる人間形成モデルへと接近していることを明らかにしてきた。

この新たな人間形成モデルを説明するための鍵概念として申請者が注目したのがパフォーマンスティヴィティ (Performativity) = パフォーマンス性である。

パフォーマンスティヴィティに着目した先行研究の萌芽は、道徳教育実践の領域・教育哲学の領域双方において既に見出される。

例えば道徳教育実践論領域では、主にアメリカ道徳教育実践において心理学者らがソーシャルスキルに注目しつつある萌芽を確認することができる。同様に日本の道徳教育の研究領域においても生き方のスキルに焦点化した道徳教育実践の可能性が指摘されている。このように、徳目主義からソーシャルスキルやライフスキルなど道徳的行為へ力点が移行するありようは、道徳教育実践研究がパフォーマンスによる人間形成モデルへと接近しつつあることを予感させる。しかしこれらの実践は未だ人間の内面に焦点をあてた人間形成モデルによる説明図式から脱し切れておらず、体系的な理論を欠いたままである。

他方で教育哲学領域においては、理性的な精神力により自らをコントロールする自律した人間モデルとは一線を画す、パフォーマンスにより流動的に形成される人間形成モデルのもつ可能性にも注目が集まっている。中でも特筆すべきは、現代言語哲学の「遂行性 (パフォーマンスティヴィティ)」概念 (J.L. オースティン) に触発された「言葉を話す」パフォーマンス、すなわち言語による人間形成という観点が提出されていることであり、この観点を中心としたパフォーマンス性と人間形成に焦点をあてた特集が *Studies in*

Philosophy and Education において組み立てられている(1999年)。しかし、研究の端緒はまだ切り開かれたばかりであるため、パフォーマンス・ヴィティ、中でも言語のパフォーマンス・ヴィティと道徳教育との関係とを論じた先行研究は未だ登場していない。

以上のことから本研究の目的は次のようになる。すなわち、一方で道徳教育研究において実践先行型で展開されている道徳的パフォーマンス能力育成の動向、他方で教育哲学において開始された言語のパフォーマンス・ヴィティの観点からみた人間形成モデル構築の動向、この両者を理論的に架橋し、パフォーマンス・ヴィティ概念に基づく道徳教育モデルを新たに構築することが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究では、以下の三つの課題を遂行した。

(1) パフォーマンス・ヴィティによる道徳性形成モデルの構築

申請者は既に、習慣的な言語パフォーマンスの反復による人間形成モデルについて、基礎研究を終えている。

本研究ではこの成果を踏まえ、国内外のパフォーマンス・ヴィティと道徳性形成に関する最新の研究をレビューし、ある言語が慣習的に反復されることによって、その言語が外的に規範的な力を持ち始めるとともに、その言語を反復する人間にもその言語の規範性が内面化されていくメカニズムを明らかにした。

(2) パフォーマンス・ヴィティによる道徳性形成モデルから見た、道徳性発達理論の再定式化

近代的な人間形成モデルの典型である道徳性発達心理学の研究者達が、実践現場において自ら依拠する人間形成モデルの「破綻」への対処を繰り返した結果、これまでとは異なる人間形成モデルへと接近しつつあることを申請者は既に明らかにしている。

本研究では、この近代的な人間形成モデルから「異なる人間形成モデル」への移行を描き出すために、鍵概念として新たにパフォーマンス・ヴィティ概念を導入することを通じて、前者から後者への移行を(道徳性発達心理学からではなく)パフォーマンス・ヴィティによる道徳性形成モデルから、包括的かつ整合的に描き出すことを試みた。

この課題を達成するために渡米し、資料収集を行った。コールバーグの道徳教育実践期の後半に編み出された民主的な討議による組織運営を掲げるジャスト・コミュニティ(Just Community、以後 J.C.と表記)実践

についての資料をはじめ、道徳性発達をめぐる諸資料を収集した。その際、道徳性発達段階説や道徳性発達心理学をめぐる学術的な諸論文ではなく、それらの学説を構築するためにコールバーグらが行った調査・分析のため膨大な一次資料を収集の対象とした。すなわち、道徳性発達段階説を構築するための基礎データとなったさまざまな被検者への聞き取り調査、J.C.で過去行われた民主的討議の際の発言の記録、当時 J.C.に在籍していた生徒たちに対して行われたインタビュー、などである。

申請者は、道徳性発達心理学による説明図式を越え出る可能性をもつ説明図式として、行為としての発話＝言語パフォーマンスを経由した道徳性形成モデルという観点からの分析を目指している。そのため、今回の課題を達成するために集めた資料はあくまで「話された言葉」に焦点化し、発話が織りなすパフォーマンスな力が、民主的な討議において J.C.実践全体をどう方向づけていったのか、あるいは道徳性発達段階説構築に際してどのようなタイプの発話が発達への証だとして拾い上げられていったのかを分析することを通じて、発話のパフォーマンス・ヴィティが J.C.実践や道徳性発達段階説において構築されていく規範性を方向付けていくと同時に、それらに関わる構成員の道徳的内面形成にも影響を及ぼしていることを明らかにした。

(3) パフォーマンス・ヴィティを鍵概念とした道徳教育実践モデルの提示

申請者はこれまでの研究成果から、道徳教育実践論の領域において、道徳性発達心理学に代表される内面重視の道徳性形成モデルからソーシャルスキルなど道徳的行為への移行を確認している。

本研究では、ソーシャルスキルトレーニングのプログラムとして最もその有効性を認められているある実践プログラムに焦点をあわせ、このプログラムを言語のパフォーマンス・ヴィティに依拠した道徳教育実践として位置づけた。

具体的にはその実践プログラムとは、セカンドステップと名付けられたプログラムである。申請者は、このプログラムを開発したアメリカ・ワシントン州 Committee for Children (以後 CFC と表記) およびその日本支部である Committee for Children Japan (以後 CFCJ と表記) が主催するセカンドステップ研修プログラムに参加、それを履修するほか、CFCJ が発行するニュースレター(ここに実践の情報が集まっている)や

CFCJ が取り扱うセカンドステップ実践キット、セカンドステッププログラムの基礎理論となる諸文献（例えばアメリカの行動主義心理学や、ソビエトのヴィゴツキー、ルリヤなどの発達心理学のものが含まれる）を入手・分析することを通じて、パフォーマンスティヴィティを鍵概念とした道德教育実践という観点から見た、セカンドステップの諸特徴を抽出した。

最終的に、課題（3）を遂行することによって明らかになったある道德教育実践モデルの実践の有効性を、課題（1）（2）を遂行することによって理論化されたパフォーマンスティヴィティによる道德性形成モデルによって理論的に裏付けることによって、パフォーマンスティヴィティによる人間形成論に基づく道德教育実践モデルを提示することを目指した。

4. 研究成果

これまでの研究成果から申請者は、パフォーマンスティヴィティを鍵概念とすることを通じて、従来の道德性形成モデルを再定式化することができた。

通常、「心」や「感情」など人間の内面に関わるものは、その存在が自明視され、道德教育においてもそれへの働きかけこそが教育的な作用であると考えられがちである。だが本研究では以下の手続きを通して、そのように自明視されている内面形成としての道德性形成モデルを覆した。

すなわち、

（1） パフォーマンスティヴィティという分析概念に着目し、言語のもつ力が外的に規範的な影響力を及ぼすと同時に、発話を反復する主体内にもその規範性が内面化されていく道德性形成のメカニズムを明らかにした。

（2） 次に、この新たな道德性形成モデルを手がかりに、従来の道德性形成モデルの再定式化を試みた。具体的な手続きとしてはコールバーグとその継承者らが展開する道德性発達段階説に着目し、発話のパフォーマンスティヴィティこそがこれらの理論構築や実践の方向づけに強く影響しつつ、規範性をつくりあげていることを明らかにした。

（3） さらに、このパフォーマンスティヴィティによる道德性形成モデルを手がかりにしながら、こんにちその実践性を広く認められている道德教育実践に関する情報収集・分析をおこなった。その結果、道德教育実践論として近年とりわけ注目されているセカンドス

テップは、自らが依拠する「道德と情動（emotion）」による説明図式によるものではなく、むしろ本研究において提示したパフォーマンスティヴィティによる道德性形成モデルに依拠することにより、より十全に整合的に説明し分析することが可能であることが示された。

以上の研究成果は、次のようにまとめられる。すなわち、道德性形成論においてこれまで自明視されてきた「心」や「感情」など「内面」的なファクターは、実は発話など言語的なものを通じて遂行されていることが明らかとなる。本研究において申請者は、言語のパフォーマンスティヴィティに着目した道德性形成モデルを定式化し、その説明可能性・有用性を示すことができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ・ 奥野佐矢子 「言語のパフォーマンスティヴィティ概念にもとづく道德教育実践モデルの検討—セカンドステッププログラムを中心に—」教育学研究紀要、第55巻、2009年、82-87頁。
- ・ 奥野佐矢子 「アイデンティティと主体に関する—考察—言説による主体形成モデルに基づくアイデンティティ論の展望と課題—」教育学研究紀要、第54巻、2008年、7-11頁。

〔学会発表〕（計3件）

- ・ 奥野佐矢子 「パフォーマンスティヴィティによる道德教育実践モデルの検討」中国四国教育学会第61回大会、2009年11月22日、島根大学。
- ・ 奥野佐矢子 「アイデンティティと差異に関する—考察—」中国四国教育学会第60回大会、2008年11月29日、愛媛大学。
- ・ 奥野佐矢子 「道徳理論と性的差異—ギリガン『もうひとつの声』をめぐる—」教育哲学会第51回大会、2008年10月25日、慶應義塾大学。

〔その他〕

書評：（計1件）

- ・ 奥野佐矢子 「（書評）ネル
- ・ ・ノディングズ著/山崎洋子・菱刈晃夫監訳『幸せのための教育』、近代教育フォーラム第18号、2009年、267-272頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥野 佐矢子 (下関市立大学)

研究者番号：40433388